Reports 市町村レポート 富山市

コンパクトなまちづくりを市民とともに

発想の大転換

「これからはコンパクトなまちづくりに向け、行政も市民も発想の大転換をしなければなりません」と森市長は切り出す。もともと富山県では持ち家志向が強い。くわえて1世帯あたりの自動車保有台数が全国2位と自動車依存型の生活背景が定着している。そのため、戦後一貫して市は郊外の開発を重視してきた。その結果、中心市街地が空洞化し、郊外に大型ショッピングセンターが点在するようになった。

一方で、高齢ドライバーの事故や自動車を運転できない高齢者が急増している。郊外で暮らす人々が高齢になり、一人で暮らすようになると、広い家は手にあまる。まちづくりにおいても除雪区間が延び、ゴミ収集のコストも増える。公園や道路、上下水道の維持といったインフラ整備もままならない。

コンパクトシティについて語る森市長

森市長は、ライフスタイルを見直すことを中心に施策を打ち出す。人口推計をもとに30年先を見越しながら都市構造のあるべき姿を捉える。例えば学校建設では、子どもが増えることを想定し、増築を踏まえて設計していたが、少子化が進む現在は、学校としてだけではなく地域のために活用することを考えねばならない。

「ポートラム」はコンパクトシティのリーディングプロジェクト

「均等な投資は笊(ざる)に水を入れるようなものです」と森市長。それより、効果が高い部分に絞って公共投資をする。いわば都市の針治療だ。すると、人も物流も動き出し、外部からの投資も増える。

「僻地にとっては不公平に見えるかもしれませんが、そうでもしないと市全体が地盤沈下してしまいます」。拠点から経済を活性化し税収として還流させることについてはおおむね市民の理解を得ているという。

富山市街地。コンパクトシティのまちづくりが始まっている

公共交通を軸とするまちづくり

コンパクトシティの核となるのが公共交通であり、富山港線のLRT化は、このまちづくりのリーディングプロジェクトとして進められた。

JR西日本から、富山市と富山ライトレール（株）がJR富山港線を引継ぎ、LRT化し公設民営方式により富山ライトレールとして2006年4月に開業させた。

斬新なデザインと利便性で、またたくまに倍以上の利用者数を達成した。通勤、通学にくわえ、高齢者の利用が増えたためだ。家に閉じこもりがちだった人に外出の機会をあたえた意味は大きい。元気な高齢者が増えれば、医療・福祉の行政コストが軽減される。

富山市は全国でも有数の鉄軌道資産をもつ。それがすべて富山駅に結節する好条件を備えている。今後、北陸新幹線が開業し、富山駅が高架化した後、富山ライトレールが高架下を通って南側の路面電車と接続する。高架下に電停が設置され、新幹線等の改札を出ると目の前に電停がある、極めて利便性の高い交通結節が実現する。

一方、中心市街地でも、路線の延伸による路面電車の環状線化が計画されている。このように、富山市では、公共交通の活性化と公共交通沿線に居住や業務等の集積を図ることによって、公共交通を軸としたまちづくりを進める計画である。

市は中心市街地に「にぎわい横丁」や映画やライブのマルチホール「フォルツァ総曲輪」といった遊興・娯楽スポットを創出している

中心市街地の活性化

都心居住と中心市街地の活性化では、高齢者住宅やケアハウスといった住宅供給を増やす。まちづくりを支えるソフト事業にもユニークなものがある。例えば、65歳以上の市民が利用できる「おでかけ定期券」。500円でこの定期券の交付を受ければ午前9時から午後5時までのあいだ、市内各地と中心市街地間の路線バスを100円で利用できる。平日は一日平均1400人が利用しており、元気な高齢者づくりに一役買っている。さらに、おでかけ定期券をもつ人にはデパートや商店街、ホテルなどが割引サービスなどを行う。消費効果もさることながら、高齢者の生活の豊かさにつながると非常に好評だ。

市民の意識の高さは地域力の象徴

まちのチカラ、人のチカラ、森のチカラ

森市長は、「まちのチカラ、人のチカラ、森のチカラ」の3つの「チカラ」を高めることを目標に掲げた。ユニバーサルデザインとエコロジーをつなげた考え方だ。

「まちのチカラ」は地域のもつチカラを高め、安全で安心して生活できる社会を実現することに他ならない。

「人のチカラ」とは、市民一人ひとりのチカラを高め、高い道徳心と創造性に満ちた活力あふれる社会を実現するということだ。「森のチカラ」は市民全体で美しい森や水を守り育み、次世代にしっかりと引き継いでいく社会を実現する取り組みだ。

合併した2005年度以降、市では毎年「ふるさと富山美化大作戦」と題して、市民参加の美化運動を実施している。市民の意識は高く、初年度は3万5000人、昨年は5万7000人もが参加した。森市長も海岸の清掃に参加したが、自宅から目的地まで、町内ごとに途切れることなく清掃していたという。森市長は、「清潔感と緑、都市内河川の豊かさが都市像のもうひとつの姿だと思います」と語り、自然と共存する「コンパクトなまちづくり」に尽力する。

Reports

市町村レポート

高岡市

人づくり、ものづくり、まちづくり

人材育成とものづくり

豊かな歴史文化が息づく高岡市。2009年に加賀藩2代藩主前田利長による開町から400年を迎える。一方で、東海北陸自動車道の全線開通や北陸新幹線の開業（2014年）にともない、名古屋や首都圏を結ぶ高速交通の要になる。人や物の交流とともに、産業活性化への期待が高まっている。

産業の活性化というと工業団地への企業誘致が一般的だが、橋市長は何よりも人材育成を重視する。市は全国でもユニークな「ものづくり・デザイン科」を小・中・養護学校全40校に設置。伝統文化の継承や地場産業の活性化、高岡市民としての意識醸成を行っている。銅器や漆器を中心に、技術を活かした工業製品やアルミ建材などの産業振興も図る。

指導者は職人たちで、なかには名人も含まれる。子どもたちは堪え性がないと思いがちだが、漆器の塗りなどをやらせると辛抱強く取り組むという。できなかったことが、アドバイスでうまくいくとうれしさを隠さない。

人材育成を重視する橋市長

「まだ1年目ですが、この経験がものづくりの道に進むきっかけになれば」と橋市長。市内には、高岡工芸高校があり、富山大学芸術文化学部がある。先細りがちなものづくり産業に人材を供給することにもなる。橋市長自身、46歳になってはじめてものづくりを体験した。高岡は銅器や漆器のまちだが、つくり方を知らない人が多いという。

市は全国でもユニークな「ものづくり・デザイン科」を小・中・養護学校全40校に設置。職人たちが子どもたちにものづくりを伝承する

駅前の「ウイング・ウイング高岡」には、生涯学習、文化交流施設、中央図書館、ホテル、ショップ、飲食店、オフィスが入居している

「社会人になって高岡がどのような町なのか説明できるようになるでしょう」と橋市長は期待を込める。子どもたちとの交流は、職人たちの活性化にもつながっている。「今まで職人たちは、17世紀からつづく伝統の上に自分たちのスタイルを築いてきました。ところが生活様式が変化して今のままでは通用しないことに気がついたのです」。教えることの喜びもさることながら、みずみずしい感性との出会いが、伝統とユーザーニーズを融合する発想を導くのだ。

中心市街地の活性化

「高岡市では自分たちのもっている財産を活かしていこうとしています」と橋市長。観光とまちづくりの財産が歴史文化であることはいうまでもない。ここには、前田利長の菩提寺である国宝瑞龍寺、一向宗の拠点である勝興寺が残っている。勝興寺では御堂の保存修理工事が終了し、これから庫裏の修理を10～15年かけて行う。今は重要文化財だが、修理後、国宝になればと願っている。

豊かな歴史文化が息づく高岡市。金屋町には格子造りの町並みが軒を連ねる

勝興寺の御堂が完成して観光客が大勢訪れるようになったが、困ったのは20年前のトイレだった。誰もが使う場所は、水準以上にしないと悪い印象をもたれてしまう。そこで環境に合わせてトイレを新築した。外部は、銅版を葺き、寺内の木を使うなどして景観を損ねないようにした。内部には地元の素材であるアルミをふんだんに使用。機能面では特に女性に配慮し、スペースを広くしたり、ショルダーバックをかける場所を設置した。

中心市街地活性化は大きな課題だ。郊外には大型ショッピングセンターがあり、若者や家族で賑わっているが、中心市街地は空洞化している。中心部に住居を増やしてコミュニティを再生するため、「まちなか居住支援」として、建て替えに際して100万円まで補助しており、効果もでているという。住む人が増えれば商業ゾーンが形成され、大仏や古いまち並みを訪れる観光客も増えて消費も伸びる。

勝興寺の公衆トイレ。銅版を葺き、地元の木材を使うなどして景観を損ねないようにした。機能面では特に女性に配慮。スペースを広くしたり、ショルダーバックをかける場所を設置している

瑞龍寺には、国内外からたくさんの観光客が訪れる

まちの賑わいの中心が、駅前の「ウイング・ウイング高岡」だ。生涯学習、文化交流施設、中央図書館、ホテル、ショップ、飲食店、オフィスが入居する多機能ビルである。事業者は第3セクターで、高岡のまちづくり会社が運営する。公共・民間の多機能集積拠点が駅に隣接するメリットは大きい。

「閑散としていた駅前にさまざまな人々が集うようになりました。特に若い人が目立ちます」と橋市長。「ウイング・ウイング高岡」は、今秋に改修工事が着工する高岡駅と2階デッキで結ばれる計画だ。超低床LRTを持つ万葉線が1階部分に乗り入れ、利用者はエレベーターで直接乗り換えできるようになる。隣接して中央駐車場があるので車でのアクセスも便利だ。

橋市長はユニバーサルデザインを空気にたとえる。見えないけれども、なくてはならない存在という意味だ。特にまちづくりでは不可欠と強調する。「まちの将来像として、合併のときに『水・緑・人・光輝く躍動のまち』を掲げました。自然環境を大事にしながら交流を育み、住民が輝くという意味です。ユニバーサルデザインは、いろいろな活動を支える仕組みづくりそのものだと思います」。

Reports

市町村レポート 黒部市

市民、企業、行政のパートナーシップによる都市観光とまちづくり

9回裏ツーアウトでの登場

堀内康男市長は以前、社員30名ほどの会社社長を務めていた。企業経営の傍ら、黒部まちづくり協議会のワークショップリーダーとしても活躍していた。突然社長を辞任して市長選に立候補したのが2006年。黒部市、宇奈月町、入善町、朝日町の合併が頓挫したことによる前市長の辞任を受けての出馬だ。この時点で合併の可能性は、「9回裏ツーアウトの場面」だったと堀内市長は述懐する。堀内市長はみなが諦めかけていたなか、法定合併協議会を立ち上げる。通常は1～2年かかるところを月6回ものペースで進行。わずか2ヶ月で黒部市と宇奈月町の合併を実現した。

企業経営の手腕は市政の中枢でも発揮された。総合振興計画の審議会メンバー48人全員に民間人を起用したのである。基本理念を市民参加として、協働のまちづくりを徹底して実践する構えだ。実効性を重視し、予算の裏づけの見込みがないものは盛り込まない。行革大綱や補助金審査なども市民に委ね、タウンミーティングも頻繁に開いている。

会社社長出身の堀内市長

観光資源の見直し

黒部市は豊かな地域だ。雇用が安定し、高い所得水準を維持している。ファスナーや建材を主力事業とするYKK黒部事業所の存在によるところが大きい。合併前、人口3万7000人で、YKKで働く従業員が7600人を占めていた。下請け会社も当然多い。堀内市長は「旧黒部市は、工業が強い反面、商業や観光が課題でした」と語り、温泉や黒部峡谷といった観光資源をもつ宇奈月町との合併メリットを強調する。

堀内市長が着目したのは都市観光だ。まず、自分たちのまちを見直すために、生地（いくじ）でまち歩きを本格的に始めた。生地には清水（しょうず）と呼ばれる公共の洗い場が18箇所ある。杭を打つとポンプなしでも水が湧き出るため、700もの家庭に掘り抜き井戸がある。北アルプスの雪解け水が100年の歳月をかけて地層で濾過された天然ミネラル水だ。「普通の漁師町が素晴らしい資源をもつまちだということがわかりました」。現在、40人ほどの観光ボランティアがおり、昨年は5000人の観光客を案内した。

宇奈月町は雄大な自然や温泉といった観光資源をもつ

国際観光都市に向けて

企業も観光振興に大きな役割を果たしている。中心となるのが「YKKツアーズ」だ。専用バスで生地の町並みとYKKの工場を視察する。地域と企業見学を結び付けた新しいスタイルで、産業観光という新たな分野を開拓した。

堀内市長はさらに、国際観光都市も視野に入れる。人材に恵まれていることが理由のひとつだ。その中心はYKK。黒部事業所を世界の研究開発と管理の拠点として位置づけており、知的労働者や外国人が多い。

昨年4月、市は国際感覚をもつ子どもたちを育成するために、国際教育特区を取得した。ネイティブの教師を6名雇い、小中学校で英会話の授業を取り入れている。YKKの社員で長期海外生活の経験者もボランティアとして協力を惜しまない。授業では、ゲームや歌などを楽しみながら英語を学ぶ。「国際感覚は自分や地域のアイデンティティの上に築かれるもの。アイデンティティを幅広く表現するのに英語は最適のツールです」。

公共交通を軸とするまちづくり

観光振興とまちづくりに不可欠なのが公共交通である。堀内市長が行政に関心をもったきっかけのひとつが新幹線だ。北陸新幹線の新駅が黒部市に決まった2001年、当時の市長が黒部まちづくり協議会に、駅周辺の整備について市民の意見の取りまとめを依頼した。新幹線市民ワークショップのリーダーとして奔走したのが堀内市長だ。当時の市の新幹線建設課は、3回ほど集まって議論したものをまとめてもらえばという考えで外部のコンサルを入れるつもりだったという。堀内市長らは激しく反発し、結局自分たちの力で何パターンかの提案をまとめてしまう。専門家の意見が必要な部分は、行政の援助を頼らず、自分たちで負担した。「JRとの調整など難しい部分もありますが、市民自らの提案として重要な意味をもっています」と堀内市長。

公共交通を守り育てるために在来線の活用も怠らない。今年の春、黒部まちづくり協議会は富山地方鉄道と共同で「楽駅停車の旅」を実施。土日は500円で乗り放題にし、自転車も持ち込めるようにした。沿線では桜1万本を植えるワークショップが進行中だ。小学校6年生の卒業記念に親子で植えるなど、今までに4500本を植えた。堀内市長は、桜を通したまちづくりを次のテーマに掲げる。例えば、弘前の城址公園には桜が5000本ほどあり、250万人が訪れる。全国でもこれだけの人を集める観光地は少なく、立山黒部アルペンルートでも、100万人を集めるのがやっとだ。「弘前の例を見ても、そこにいたるまでに100年近くがかかっています。まちづくりとはそういうもの。短期間で効果が現れる程度では本物とはいえません」。

「楽駅停車の旅」のふりーきっぷ。土日をワンコインで乗り放題にした

生地ではまち歩きで観光資源を見出した。地域には18箇所の清水と700もの掘り抜き井戸がある

黒部市は国際教育特区。小中学校で英会話の授業を取り入れている

YKKツアーズは地域と企業見学を結びつけた新たな産業観光を開拓した

富山地方鉄道沿線では桜1万本を植えるワークショップが進行中